

# Suyagaḍaṅga 第一篇第2章の研究

—— 和 訳 ——

榎 本 正 明

はじめに

Sūyagaḍaṅga (Skt. Sūtrakṛtāṅga<sup>(1)</sup>, 以下 Sūy.) は, Jaina 白衣派が伝承する四十五の Āgama(聖典)中, 最も重要であるとされる Aṅga の第二番目に位置する二篇全23章よりなる経典である。第一篇は韻文(Śloka, Vaitāliya 等)で書かれ, 全16章から成る。第二篇は散文で叙述され, 全7章から成っている。また, 第二篇は第一篇より新しいものとされ, 第一篇の補遺を集成したものと見られている。<sup>(2)</sup>

周知の如く, Jaina 聖典には新古の二層が存するが, Sūy. の第一篇は Āyāraṅga の第一篇, Uttarajjhāyā, Dasaveyāliya, Isibhāsiyāṃ と共に, 最古層に属するものの一つとされている。<sup>(3)</sup>

さて, Sūy. の内容と説示の目的は異教の主張の論駁, 避けるべき危難や誘惑についての警告, 修行者の敬虔な信仰生活等を中心とし, Jaina の若い修行者達の信仰を固め, 最高の境地へ導くことを目的としたものである。異教の主張の中には, 仏教, 唯物論者, Vedānta 派, Vaiśeṣika 派等があり, 古代インドに於ける宗教, 及び諸学派の状況を知るためにも, この Sūy. は

(1) Sūy. の Sanskrit 名に関しては, 拙稿「Sūyagaḍaṅga の題名について」『印仏研』33巻2号(昭60. 3, pp. 541~542) 参照。

(2) M. Winternitz『ジャイナ教文献』中野義昭訳, (日本印度学会, 1976) pp. 22, 25, p. 347 註50 参照。

(3) W. Schubring: *Die Lehre der Jainas*, Grundriss III, 7, Berlin 1935. §42 参照。

非常に重要な經典であると言える。<sup>(4)</sup>

第一篇第2章の内容は、まず第1節では、「悟りと無常」が主題であるが、その具体的な内容には「生命の無常」、「愛着の放棄」、「迷妄の除去」などが述べられ、また、苦行の道へ入った者はそれらに引き寄せられることがないように努力すべきであると述べられている。第2節は、「慢心と避けるべきもの」が主題であるが、慢心については、修行者は他の人が輪廻で苦しむ様を見て、自分がそこから逃がれているということを誇ってはいけないということが説かれ、「悪しき行為、所有、冷水、口論」等が避けるべきものとして挙げられている。第3節は、「無知によって積まれた（業の）除去」が主題であるが、「愛欲、無常、殺害、所有」等に対する無知から、多くの業が積まれることになり、多くの苦しみを経験することになると説明し、Jina の教えに従って、それら悪しき行為を捨て去って、自制し、業を滅ぼすことを説き、このように修行した者は罪から逃れて解脱に到るのであると述べられている。

また、この第2章の章題は Veyāliya であるが、この Veyāliya には2種の意味があるとされる。1つは「業を破壊する (vaidārika)」という意味であり、もう1つは「韻律名<sup>(5)</sup> (vaitāliya)」である。

さて、今回日本訳の為に使用した Text は以下の如くである。まず、底本として、

*Ācārāṅgasūtra and Sūtrakṛtāṅgasūtram, with the Nirvyukti of Ācārya Bhadrabāhu Svāmi and the commentary of Śīlāṅkacārya, Lālā Sun-*

(4) Winternitz 前掲書、pp. 22~23、及び Louis Renou et Jean Fillozat 『インド学大事典』山本智教訳、(金花舎、1981) 第3巻 p. 256 §2390 参照。

(5) veyāliya (vaitāliya) の韻律については次の論文が詳しい。阪本純子「Pāli Jātaka に於ける mātrachandhas の性格」『仏教研究』第7号、昭53、pp. 43~64。

通常、vaitāliya metre は以下の如し。

a. c pāda    6 + — — — ×

b. d pāda    8 + — — — ×

darlāl Jain Āgamagranthamālā vol. 1, original ed. Late Ācārya Sāgar-ānandasūriji Mahārāja, re-ed. with appendices etc. by Muni Jambūvijayajī, the disciple of Late H. Holiness Munirāja Śrī Bhuvanavijayaji Mahārāja, Delhi 1978.

を用いた。この他に、参考資料として、以下の4つの Text を用いた。

*Sūyagaḍaṅgasutta (part 1), with Bhadrabahu's Niryukti and Cūrṇi by anonymous writer*, Prakrit Text Society Series No. 19, ed. Muni Shri Punyavijayaji, Ahmedabad 1975. (以下 P 本)

*Suttāgame* vol. 1, ed. Puppha bhikkhu, Gurgaon 1953. (以下 S 本)

*Āṅga-suttāni* vol. 1, ed. Muni Nathamal, Delhi 1975. (以下 A 本)

*Sūyagaḍaṅgasuttam*, Jaina-Āgama-Series No. 2 (2), ed. Muni Jambūvijaya, Bombay 1978. (以下 J 本)

底本と以上の4つの Text との間に重要な variant がある場合、訳註に示すことにした。また、日本訳の為の参考資料として、英訳である

*Jaina Sūtras*, The Sacred Books of the East, vol. XLV, part II, Translated from Prākṛit by Hermann Jacobi, Oxford 1895, repr. Delhi 1964.

と、独訳である

*Worte Mahāvīras, Kritische Übersetzungen aus dem Kanon der Jaina* von Walther Schubring, Göttingen 1926.

とを用いた。註釈としては、底本に付されている Śīlāṅka の Ṭīkā 及び P 本に付されている Jinadāsa の Cūrṇi を用いた。その他、参考文献として、W. Schubring: *Āyāraṅga-sutta*, Text, Analyse und Glossar, Leipzig 1910. (以下 Schubring の語彙表)

R. Pischel: *Comparative Grammar of the Prākṛit Languages* (English Translation) Delhi 1965. (以下 Pis.)

W. B. Bollée: *The Pādas of the Suttanipāta, with parallels from the Āyāraṅga, Sūyagaḍa, Uttaraḥjāyā, Daseveyāliya and Isibhāsiyāim*,

Studien zur Indologie und Iranistik, Monographie 7, Reinbek 1980. (以下 Bollée) を用いた。

§1. 第1節

1. sambujjhaha<sup>(1)</sup> kiṃ na bujjhaha, sambohi khalu pecca dullahā /  
no hūvaṇamaṃti rāio, no sulabham puṇar āvi jīviyaṃ //

正しく悟りなさい！ なぜあなた達は悟らないのか？ 完全な悟りは、実に、来世に於ては得難いものである。日々は（再び）戻って来ない。また、再び（人間としての）生命を得ることは易くはない。

2. ḍaḥarā<sup>(1)</sup> vuḍḍhā ya pāsaha, gabbha'tthā<sup>(2)</sup> vi cayaṃti māṇavā /  
seṇe jaha vaṭṭayaṃ hare, evaṃ āu-khayaṃmi tuṭṭai //

見なさい！ 若い人や、老いた人や、胎内にある人でさえ死ぬ。あたかも、鷹が鶉を連れ去るように、そのように、寿命（を決定する業）が尽きれば死ぬ。

3. māyāhiṃ piyāhiṃ luppai, no sulahā sugai<sup>(1)</sup> ya peccao /  
eyāiṃ bhayāiṃ<sup>(2)</sup> pehiyā, ārambhā viramejja suvvaē //

（人は）母や父（との肉親の愛情）によって惑わされて、それで来世に於ける安穩は得難いものとなる。これらの危難を見て、極めて聖なる行為〔苦行〕をなす者は、悪しき行為を慎しむべきである。

4. jam iṇaṃ jagatī puḍḍho jagā, kammehiṃ luppamti pāṇiṇo /  
sayam eva kaḍehiṃ<sup>(1)……</sup> gāhai, ṇo tassa muccejja<sup>(1)……</sup> 'puṭṭhayaṃ<sup>(2)……</sup> //

すなわち、世間に於ては、世の中の生き物達は各々（自らなした）業によって害される。まさに、自らなしたことによって没落する。（報いが）経験されていない（業は）彼から離れないだろう。

5. devā gaṃdhavva-rakkhasā, asurā<sup>(1)</sup> bhūmi-carā sarisivā /  
rāyā nara-seṭṭhi-māhaṇā, ṭhāṇā<sup>(2)……</sup> te 'vi cayaṃti dukkhiyā //

神々、ガンダルヴァ、ラクシャ、アシュラ、地上の動物、蛇達、王族、（普通の）人、商人、バラモン達であっても、苦しんで（自らの）位置を捨てる〔死ぬ〕。

6. kāmehi ya samthavehi<sup>(1)……</sup> giddhā, kamma-sahā<sup>(2)……</sup> kāleṇa jaṃtavo /  
tāle jaha baṃdhaṇa-ccue, evaṃ āu-khayaṃmi tuṭṭatī<sup>(3)……</sup> //

愛欲や、親愛に貪欲な人は、時機が来れば行為の果報を受けることになる。あたかも、ターラ樹の果実が茎から落ちるように、そのように、寿命（を決定する業）が尽きれば死ぬ。

7. je yāvi bahu-ssue siyā, dhammiya māhaṇa-bhikkhū siyā /  
 abhiññāma-kaḍḍehiṃ mucchie, tivvaṃ te kammehiṃ kiccatī //

たとえ、多くの（事柄を）学んだ者であっても、有徳なバラモンや、乞食の修行者であっても、虚偽の心（など）によってなされたことに耽るならば、彼らは業によって厳しく切り刻まれる。

8. aha pāsa vivegam utṭhie, avitinne iha bhāsai dhuvaṃ /  
 ṇāhisi āraṃ kao paraṃ, vehāse kammehiṃ kiccatī //

さて、決定智の為に努力している者は見なさい！（未だ輪廻の海を）渡らずに、この世に於て自信ありげに説教する者がある。どうして（その人から）此の世と彼の世のことを知ることができようか。その間に、業によって切り刻まれる。

9. jai vi ya ṇigaṇe kise care, jai vi ya bhuñjiya māsa-m-aṃtasā /  
 je iha māyāi mijjai, āgaṃtā gabbhāya ṇaṃtasā //

たとえ、裸形で、痩せ細って修行したとしても、またたとえ、月の終わりに（だけ）食事をしたとしても、此の世で欺瞞などを有している者は、無限に母胎へ戻って来る。

10. puriso rama pāva-kammaṇā, paliyaṃtaṃ maṇuyāṇa jīviyaṃ /  
 sannā iha kāma-mucchiyā, moḥaṃ jaṃti narā asaṃvudā //

人は悪しき業を慎しめ！ 人々の人生とは滅びつつあるものである。此の世に於て（欲望に）沈み、愛欲に耽り、自制していない人々は迷妄に陥いる。

11. jayayaṃ viharāhi jogavaṃ, aṇupāṇā paṃthā duruttarā /  
 aṇusāsaṇaṃ eva pakkame, vīrehiṃ saṃmaṃ paveiyaṃ //

努力して（心を）集中して歩きまわれ！ 微細な虫がいる道は越え難い（から）。勇者達によって正しく示された教えに赴くべきである。

12. virayā virā samutṭhiyā, koha-kāyariyāi-piṣaṇā /  
 pāṇe ṇa haṇaṃti savvaso, pāvāo virayā 'bhinivvudā //

英雄達（は）（悪しき業を）慎しみ、奮闘努力し、怒りや欺瞞を砕いており、決して生き物を殺すことがなく、悪しきもの〔業〕を慎んだ平安な者である。

13. <sup>(1)</sup>ṇa vi tā aham eva <sup>(2)</sup>luppae, <sup>(2)</sup>luppamti <sup>(3)</sup>loamsi <sup>(3)</sup>pāṇiṇo /  
<sup>(2)</sup>evam <sup>(2)</sup>sahiehiṃ <sup>(3)</sup>pāsaē, <sup>(3)</sup>aṇihe se <sup>(3)</sup>puṭṭhe <sup>(3)</sup>ahiyāsae //

まず、私だけが苦しんでいるのではない。世の中の生き物は（全て）苦しんでいる。完成した人はこのように見るべきである。彼は（苦しみを）経験しても、悩むことなく、忍耐すべきである。

14. <sup>(1)</sup>dhunīyā <sup>(1)</sup>kuliyam va <sup>(1)</sup>levavam, <sup>(1)</sup>kisae <sup>(1)</sup>deham <sup>(1)</sup>aṇāsaṇā <sup>(1)</sup>iha /  
<sup>(1)</sup>avihiṃsām eva <sup>(1)</sup>pavvae, <sup>(1)</sup>aṇudhammo <sup>(1)</sup>muṇiṇā <sup>(1)</sup>pavedito //

あたかも、漆食（を塗られた）壁を振り動かすと（漆食が落ちて、壁が）薄くなるように、此の世に於て、身体は断食によって痩せ細る。（このように生き物を）殺さないことに赴くべきである。聖者によって（解脱に）向かう教えが示された。

15. <sup>(1)</sup>sauṇī <sup>(1)</sup>jaha <sup>(1)</sup>pamsu-guṇḍiyā, <sup>(1)</sup>vihuṇiya <sup>(1)</sup>dhamsayai <sup>(1)</sup>siyam <sup>(1)</sup>rayam /  
<sup>(1)</sup>evam <sup>(1)</sup>daviōvahāṇavam, <sup>(1)</sup>kammam <sup>(1)</sup>khavai <sup>(1)</sup>tavassi-māhaṇe //

あたかも、塵に覆われた鳥が附着した塵を振り払って四散させるように、そのように自制し懸命に修行し、苦行をなす聖者は業を滅ぼす。

16. <sup>(1)</sup>uṭṭhiyam <sup>(1)</sup>aṇagāra-m-esaṇam, <sup>(1)</sup>samaṇam <sup>(1)</sup>ṭhāṇa-ṭhiām <sup>(1)</sup>tavassinaṃ /  
<sup>(2)</sup>ḍaharā <sup>(2)</sup>vuḍḍhā ya <sup>(2)</sup>patthae, <sup>(2)</sup>avi <sup>(2)</sup>susse <sup>(2)</sup>ṇa ya <sup>(2)</sup>taṃ <sup>(2)</sup>labhejja <sup>(2)</sup>ṇo //

奮闘し、出家者としての在り方を追求し、（聖者の）段階に到り、苦行をなす修行者を、若い人や老いた人達が（俗家に戻るよう）乞い求めるだろう。しかし、たとえ（声が）枯れるほど（乞い求めても）人々は彼を得ることはできない。

17. <sup>(1)</sup>jai <sup>(2)</sup>kāluṇiyāṇi <sup>(2)</sup>kāsiyā, <sup>(2)</sup>jai <sup>(2)</sup>royamti <sup>(2)</sup>ya <sup>(2)</sup>putta-kāraṇā /  
<sup>(2)</sup>daviyam <sup>(2)</sup>bhikkhu <sup>(2)</sup>samuṭṭhiyam, <sup>(2)</sup>ṇo <sup>(2)</sup>labbhanti <sup>(2)</sup>ṇa <sup>(2)</sup>saṃthavittae //

たとえ、あわれな姿をしようとも、またたとえ、子供をだしにして歎こうとも、自制し、奮闘努力している乞食の修行者を留めることは得られない。

18. <sup>(1)</sup>jai <sup>(1)</sup>vi ya <sup>(1)</sup>kāmehi <sup>(1)</sup>lāviyā, <sup>(1)</sup>jai <sup>(1)</sup>ṇejjā <sup>(1)</sup>hi <sup>(1)</sup>ṇa <sup>(1)</sup>baṃdhium <sup>(1)</sup>gharam /  
<sup>(3)</sup>jai <sup>(3)</sup>jīviya <sup>(3)</sup>nāvakaṃkhae, <sup>(3)</sup>ṇo <sup>(3)</sup>labbhanti <sup>(3)</sup>ṇa <sup>(3)</sup>saṃthavittae //

たとえ、愛欲によって誘惑しても、またたとえ、彼を縛って家に連れて来ても、もし（彼が世俗的）生活を望まないならば、彼を留めることは得られない。

19. <sup>(1)</sup>sehamti <sup>(1)</sup>ya <sup>(1)</sup>ṇam <sup>(1)</sup>mamāiṇo, <sup>(1)</sup>māya <sup>(1)</sup>piyā <sup>(1)</sup>ya <sup>(1)</sup>suyā <sup>(1)</sup>ya <sup>(1)</sup>bhāriyā /  
<sup>(2)</sup>posāhi <sup>(2)</sup>ṇa <sup>(2)</sup>pāsao <sup>(2)</sup>tumam, <sup>(2)</sup>loga <sup>(2)</sup>param <sup>(2)</sup>pi <sup>(2)</sup>jahāsi <sup>(2)</sup>'posañño //

(彼を) 我がものとしたいと思う母や、父や、子供達や、妻が彼を諭す。あなたは我々を見て、養いなさい！ (我々を) 養わない(ような)者は来世を捨てることになる。

20. anne annehim mucchiyā, moham jamti ṇarā asaṃvuḍā /  
visamaṃ visamehim gāhiyā, te pāvehim puṇo pagabbhiyā //

人々は他のものに受着している。自制していない人々は愚痴に赴く。罪深いことによって、(彼らは) 罪深いところに沈む。彼らは悪しきもの〔業〕によって、また、高慢となる。

21. <sup>(1)...</sup>tamhā davi <sup>...(1)</sup>ikkha paṃḍie, pāvāo virate 'bhiṇivvuḍe /  
<sup>(2)...</sup>paṇae <sup>...(2)</sup>vīraṃ <sup>(3)</sup>mahāvihim, siddhi-paṇaṃ neāuyam <sup>(3)</sup>dhuvaṃ //

それゆえ、自制し、悪しき(業)を慎しみ、平安なる賢人は見なさい！ 敬虔な勇者は不変なる偉大なる道、安穩への道、救済を導く道へ、

22. veyāliya-maggam āgao, maṇa-vayasā <sup>(1)</sup>kāyeṇa <sup>(2)</sup>saṃvuḍo /  
<sup>(3)</sup>cicca <sup>(3)</sup>vittam ca <sup>(3)</sup>ṇāyao, āraṃbham ca <sup>(3)</sup>susaṃvuḍe care //

(すなわち、業を) 破壊する道へ入り、身・口・意を制御し、財産や、親類や、(殺生等の) 行為を捨てて、よく自制して修行すべきである。

## §2. 第2節

1. taya saṃ va jahāi se rayam, iti saṃkhāya muṇi ṇa majjai /  
<sup>(1)</sup>goya'nnatareṇa <sup>(2)...</sup>māhaṇe, aha seya-karī <sup>...(2) (3)</sup>anesī <sup>(3)</sup>imkhiṇi //

あたかも、(蛇が)自らの皮を(脱ぎ)捨てるように、彼は(業)塵を(捨てる)と考えても、聖者は誇らない。(真の)パラモンは血統や他のことによっても(誇らない)。また他人を中傷することは悪しき結果を生じる。

2. jo <sup>(1)</sup>paribhavai <sup>(2)</sup>param jaṇam, saṃsāre parivattaī <sup>(3)</sup>maham /  
adu <sup>(3)</sup>imkhiṇiyā u <sup>(4)</sup>pāviyā <sup>(4)</sup>iti <sup>(4)</sup>saṃkhāya muṇi ṇa majjai //

他人を侮辱する者は、長い間、輪廻を流転する。また、中傷も悪しきことであると考えて、聖者は慢心を持たない。

3. je yāvi aṇāyage siyā, je vi ya pesaga-pesae siyā /  
<sup>(1)</sup>je <sup>(2)</sup>moṇa-payam <sup>(2)</sup>uvaṭṭhie, ṇo lajje samayam <sup>(2)</sup>sayā yare //

主人がいない(ような身分の高い)者であっても、召使いの召使い(のような身分の低

い) 者であっても、聖者の地位に到った者は(自分の身分)を恥じることなく、平等にいつも行動すべきである。

4. sama annayarammi samjame, samuddhe samaṇe parivvae /  
je āva-kahā samāhie, davie kālam akāsi paṇḍie //

(このように) 平等(に行動する人は) 何らかの自制のもとに、清浄な修行者として遊行すべきである。死ぬまで三昧をなして、賢者は自制しつつ死んだ。

5. dūraṇ aṇupassiyā muṇī, titaṇ dhammam aṇāgayaṇ tahā /  
puṭṭhe parusehiṇ māhaṇe, avi haṇṇū samayaṇmi riyai //

(真の) パラモンたる聖者は、はるか遠くのもの〔解脱〕や、同様に、過去や未来の対象を見て、ひどいことを経験し、打たれたとしても、教えに従って修行する。

6. <sup>(1)</sup>paṇṇa-samatte sayā jae, <sup>(2)</sup>samatā dhammam udāhare muṇī /  
<sup>(3)</sup>suhume u sayā alūsae, <sup>(4)</sup>ṇo kujjhe ṇo māṇi māhaṇe //

完全な知識を持った聖者は、常に、(煩悩などを) 征服すべきであり、正しく教えを説くべきである。しかも、(真の) パラモンは些細なことも決して怠らず、怒ることもなく、慢心を持つべきでもない。

7. bahu-jaṇa-ṇamaṇaṇmi samvuḍo, <sup>(1)...</sup>savva'tṭhehiṇ <sup>...(1)</sup>ṇare aṇissie /  
<sup>(2)...</sup>harae va sayā <sup>...(2)</sup>aṇāvile, dhammaṇ pādur akāsi kāsavaṇ //

多くの人によって従われているもの〔教え〕に(従って) 自制し、すべての世俗的なこと〔束縛〕より離れた人は湖の如く常に清浄で、カーシュヤパ〔Mahāvīra の姓〕の教えを明示した。

8. bahave pāṇā puḍho siyā, patteyaṇ samayaṇ <sup>(1)</sup>samihiyā /  
jo moṇa-padaṇ uvaṭṭhite, viratiṇ tattha akāsi paṇḍie //

多くの生き物達は、それぞれに住しているが、各々同様に(苦・楽を感じている)のを見て、聖者としての地位に到った者である賢者は、その生き物に対して(殺害などの行為を) 慎んだ。

9. dhammassa ya pārae muṇī, āraṇbhassa ya aṇtae ṭhie /  
soyaṇti ya ṇaṇ mamāṇo, ṇo labbhaṇti ṇiyaṇ pariggahaṇ //

また、聖者は教えに充分精通しており、有害な行為を止めている。しかし、我執を持っている者達は歎き悲しむ。永遠な所有を得られずに。



10. iha-loga-duhāvahaṃ viū, paraloge ya duhaṃ duhāvahaṃ /

viddhaṃsaṇa-dhammam eva taṃ, iti vijjaṃ ko 'gāraṃ āvase //

此の世に於て（所有などは）苦を伴ったものである。来世に於ては、さらに大きな苦を伴ったものであると知られる。それが、まさに破壊する性質を持ったものであると知って、誰が（俗）家に留まるであろうか。

11. mahayaṃ paligova jāniyā, jāvi ya vaṃdana-pūyaṇā ihaṃ /

suhume salle duruddhare, viū maṃtā payahijja saṃthavaṃ //

大いなる食欲を知（って捨て）るべきである。またたとえ、此の世に於ける賞讃や尊敬であっても（知って捨てるべきである）。微細な矢は抜くことが難しいと考えて、知者は讃辞を捨てるべきである。

12. ege care(ra) ṭhāṇaṃ āsaṇe, sayaṇe ege(ga) samāhie siyā /<sup>(1)</sup>

bhikkhū uvahāṇa-vīrie, vai-gutte ajjhata-saṃvuḍo //

（乞食の修行者は）ひとりで座所に於て不動を修行し、ひとりで臥所に於て三昧（を修行して）あるべきである。乞食の修行者は苦行の力を持って、語を護り、心を制御して（あるべきである）。

13. ṇo pihe ṇa yāvapaṃguṇe, dāraṃ sunna-gharassa saṃjae /<sup>(1)</sup>

puṭṭhe ṇa udāhare vayāṃ, ṇa samucche ṇo saṃthare taṇaṃ //

自制した苦行者は、住む人のない家（に留まった時、その家）の門を開いても、閉じてもしけない。問われても（粗い）言葉を語ってはいけない。また、（草を）刈ってもいけないし、それを（自分の臥所に）撒散らしてもいけない。

14. jattha 'tthamie aṇāule, sama-visamāiṃ muṇi 'hiyāsae /

caragā adu vāvi bheravā, adu vā tattha sarisivā siyā //

聖者は日没後に於ても平静であり、平坦や、平坦でない（臥所に）耐えるべきである。その場所には、蛟、或いは、恐しい動物、或いは、蛇がいるかもしれない。

15. tiriyaṃ maṇiyā ya divvagā, uvasaggā tivihā<sup>(1)</sup> 'hiyāsiyā /

lomādiyaṃ ṇa hārise, sunnāgāra-gao mahā-muṇi //

動物や、人間や、神々から（生じる）3種の危難に耐えるべきである。偉大な聖者は住む者のない家に滞在した時、（恐怖によって）髪などを逆立ててはいけない。

16. ṇo adhikaṃkhejja jīviyaṃ, 'vi ya pūyaṇa-patthae siyā /<sup>(1)</sup>

abbhattham uviṃṭi bheravā, sunnāgāra-gayassa bhikkhuṇo //

生き永らえようと望んではいけない。また、尊敬さえも請うべきでない。住む者のない家に滞在した乞食の修行者にとって、恐いものが繰り返し襲ってくる。

17. uvaṇṇiyatarassa tāṇo, bhayaṃāṇassa vivikkam āsaṇaṃ /  
sāmāyam āhu tassa jaṃ, jo appāṇa bhae ṇa daṃsae //

深く正しい知識に精通し、他の人々の保護者であり、(人里)離れた住まいを選び、また、(危難に対しても)恐れが現われない彼は、すべての罪ある行為を捨てた者であると(人々は)言った。

18. usiṇḍaga-tatta-bhoiṇo, dhamma-<sup>(1)</sup>ṭṭhiyassa muṇissa hīmato /  
saṃsaggi asāhu-r-āhiṃ, asamāhi u tahāgayassa 'vi //

熱湯で暖められた食物(を用い)、教えを守り、慎しみ深く、そのように行じる聖者であっても、悪しき者などとの交際によって、心の散慢が生じる。

19. ahigaraṇa-kaḍḍassa bhikkhuṇo, vayaṃāṇassa pasajjha dāruṇaṃ /  
atṭhe parihāyati bahu, ahigaraṇaṃ na karejja paṃṇie //

乞食の修行者が口論をしたり、荒々しい(言葉)を語るならば、(彼の偉大な)行為は大いに失なわれる。(それゆえ)賢者は口論をしてはならない。

20. siḍḍaga-paḍidugumchiṇo, apadiṇṇassa lavāvasappiṇo /  
sāmāyam āhu tassa jaṃ, jo gihi-matte 'saṇaṃ na bhujjati //

冷たい水を嫌悪し、主張することがなく、僅かな(業でさえ)捨て去り、家長の鉢によって食物を食べることのない彼の人は、そのような罪ある行為を捨て去っていると言われた。

21. na ya saṃkhaṃ āhu jīviyaṃ, taha vi ya bāla-jaṇo pagabbhai /  
bāle pāpehiṃ mījjati, iti saṃkhāya muṇi ṇa majjati //

また、人生は清浄なものではないと言われる。それにもかかわらず、愚かな人は傲慢である。愚かな人は多くの悪しき(業)に充ちていると考えて、聖者は誇ることがない。

22. chaṃdena pale' imā payā, bahu-māyā moheṇa pāḍā /  
viyaḍḍeṇa palimti māhaṇe, siṇṇaṃ vayasā 'hiyāsae //

この人々は欲望によって進んで行く。多くの欺瞞を持ち、迷妄によって覆われている。(真の)バラモンはすばらしい行為によって進む。語(など)に関して、寒・熱に(泣き

言をいわず) 耐えるべきである。

23. kujae aparājie jahā, akkhehiṃ kusalehiṃ divayaṃ /

kaḍam eva gahāya ṇo kaliṃ, no tiyaṃ no c' eva dāvaram //

あたかも、(誰にも) 負かされたことがない賭博者が、良いサイコロによって賭博する時には、4だけを振って、1や3や2は決して(振ら)ないように。

24. evaṃ logaṃmi tāiṇā, buie je dhamme aṇuttare /

taṃ giṇha hiyaṃ ti uttamaṃ, kaḍam iva sesa 'vahāya paṃḍie //

そのように、保護者〔Mahāvira〕によって説かれた(此の)世に於ける最上・最高の教えに、(自らの)為と(思っ)て従いなさい。あたかも、巧みな賭博者が他の(数)を避けて、4(のみを出す)ように。

25. uttara maṇuyāṇa āhiyā, gāma-dhammā(mma) ii me anussuyaṃ /

jaṃsī viratā samuṭṭhiyā, kāsavassa aṇudhamma-cāriṇo //

私が聞いた所によると人間にとって、五官の対象が最も強い(束縛)であると言われる。(しかし)カーシュヤパ)の教えに従って修行する者達はその(五官の対象)を節制して、奮闘努力する。

26. je eya caraṃti āhiyaṃ, nāeṇaṃ mahayā mahēsiṇā /

te uṭṭhiya te samuṭṭhiyā, annonnaṃ sāraṃti dhammao //

この偉大な聖仙である高貴なジュニャータ〔Mahāvira〕によって説かれた(教え)を行じる者達は、奪い立ち、奮闘努力し、教えによって互いに行動させる。

27. mā peha purā paṇāmae, abhikaṃkhe uvahiṃ dhuṇittae /

je dūmaṇa tehiṃ ṇo ṇayā, te jāṇaṃti samāhim āhiyaṃ //

目の前にある(人)を従わせるもの〔欲望の対象〕に気を取られてはいけない。(業や煩惱などの)附属物を振り払うことを願うべきである。不愉快にさせるもの〔他人からの非難など〕に屈服しない人々は、三昧を知っているとと言われる。

28. ṇo kāhie hojja saṃjae, pāsaṇie ṇa ya saṃpasārae /

naccā dhammaṃ aṇuttaraṃ, kaya-kirie ṇa yāvi māmae //

修行者は長時間に亘って話しをしてはいけない。また、むやみやたらと質問をしてもいけない。(種々な噂を) 広げてはいけない。そして、最上の教えを知って、なされるべきことを実行し、我がものという考えも(持っては)いけない。

29. channaṃ ca pasasṃsa ṇo kare, na ya ukkosa pagāsa māhaṇe /  
tesim suvivega-m-āhie, paṇayā<sup>(1)</sup> jehim sujosiyaṃ dhuyaṃ //

(真の) バラモンは虚偽や、貪欲や、慢心や、怒りに赴いてはいけない。そして、それらを正しく捨てることに専心し、(業を) 振り払うことをよく実践した者は謙虚な人々である。

30. aṇihe sahie susaṃvuḍe, dhamma'ttḥī uvahāṇa-vīrie /  
viharejja samāhi-imdie, atta-hiaṃ khu duheṇa labbhai //

罪業なく、完成し、よく制御され、真理を求め、苦行の実践に精進する者は感官を統一すべきである。魂の安穩は実に得難い。

31. ṇa hi ṇūṇa purā aṇussutaṃ, adu vā taṃ taha ṇo samuṭṭhiyaṃ /  
muṇiṇā<sup>(4)</sup> sāmāiāhitam, nāeṇaṃ jaga-savva-damṣiṇā //

正しい制御(など)に関しては、聖者であり、世界のすべてを知っているジュニャータ〔Mahāvira〕が説いたものであるが、それは確かに、以前に学ばれたものではなく、もしくは、(同様に) 以前に生じたものでもない。

32. evaṃ mattā mahamṭaraṃ, dhammam iṇaṃ sahiyā bahū jaṇā /  
guruṇo chaṃdāṇuvattagā, virayā tinna mah'ogham āhitam //

このように、多くの完成した人々はこの教えが偉大なものだと考え、指導者の意志に従って、(諸々の悪しき業を) 捨てて、大いなる(輪廻の) 暴流を渡ったと言われる。

### §3. 第3節

1. saṃvuḍa-kamassa bhikkhuṇo, jaṃ dukkhaṃ puṭṭhaṃ abohie /  
taṃ saṃjamao 'vacijjai, maraṇaṃ hecca vayaṃti paṃdiyā //

業を制御した乞食の修行者にとっては、(かつて) 無知によって経験した苦が自制によって減少する。(およそ) 賢者達は死を捨てて、行脚する。

2. je vinnavaṇāhi 'josiya, saṃtinnehiṃ samaṃ viyāhiyā /  
taṃhā uḍḍhaṃ ti pāsahā, adakkhu kāmāi rogavaṃ //

(女性の) 誘惑を受けつけない者達は(輪廻の海を) 越えた人々と同様なものとして呼ばれる。それゆえ、すぐれていると見なさい! そして、彼らは愛欲を病気の如く見なした。

3. aggaṃ vaṇiehiṃ<sup>(1)</sup> āhiyaṃ, dhāraṃti<sup>(2)</sup> rāṇiyā ihaṃ /

evam<sup>(8)...</sup> paramā mahavvayā, akkhāyā u sarāi-bhoyaṇā<sup>...(3)</sup> //

此の世で、王族達は商人によって供給された最上のものを着用する。同様に、苦行者の(五)大誓と、夜食(の禁)は最上だと語られている。

4. je iha sāyāṇugā narā, ajjhovavannā kāmehiṃ mucchiyā /  
kivaṇṇa<sup>(2)</sup> samam pagabbhiyā, na vi jāṇamti samāhim āhitam //

此の世で、快楽を望む人々は愛欲に耽溺し、耽っている。みじめな者と同じであり、傲慢である。彼らは三昧を知らないと言われた。

5. vāheṇa jahā va vicchae, abale hoi gavam pacoe /  
se amtas<sup>(1)...</sup>o appa-thāmae, nāivahai<sup>...(1)</sup> abale visīyati //

雄牛はせき立てられて、荷車によって傷つけられたならば、力が弱くなる。(そして)、完全に力がなくなるまで弱くなると、(荷車を)引くことができず倒れる。

6. evam<sup>(1)</sup> kām'esaṇam viū, ajja sue payahejja samthavam /  
kāmi kāme ṇa kāmae, laddhe vāvi aladdha kaṇḥuī //

このように、欲望の追求(の結末)を知る人は今、或いは、明日、親愛を捨てるべきである。また、欲望ある者はそれがどこかで得られようと、得られなくても、諸々の欲望を熱望してはいけない。

7. mā paccha asādhutā bh<sup>(1)</sup>ave, accehi<sup>(2)</sup> aṇusāsa appagam /  
ahiyam ca asāhu soyatī, se thaṇatī<sup>(3)</sup> paridevatī bahum //

未来に悪しき状態があってはいけない。(執着を)越えよ！ 自らを鍛えよ！ 悪しき者は(悪しき業の報いを受けて)一層泣く。彼は大いに嘆き、歎く。

8. iha jīviyam eva pāsahā, taruṇe vāsa-sayassa tuṭṭatī /  
ittara-vāse ya bujjhaha, giddha-narā kāmesu mucchiyā //

此の世に於ける生存を見よ！ 生まれたばかりの者であっても、百年(も経過すれば)死ぬ。短い生存であるということに目覚めよ！(それにもかかわらず)貪欲な人々は愛欲に耽っている。

9. je iha ārambha-nissiyā, āta-damḍā<sup>(1)</sup>(da) egamta-lūsagā /  
gamtā te pāva-logayam, cira-rāyam<sup>(2)</sup> āsuriyam disam //

此の世に於て(殺生などの)行為に従事する者は自らも傷つけ、常に殺生をする。彼ら

は悪しき世界、すなわち、アシュラの領域に長い間赴く。

10.  $\eta a$  ya samkhayam āhu jīvitam, taha vi ya bāla-jaṇo pagabbhāi /  
paccuppanneṇa <sup>(1)</sup>kāriyam, ko daṭṭhum paraloyam āgate //

また、人生は清浄なものではないと言われる。それにもかかわらず、愚かな人は傲慢である。現世のものに関して（のみ）なされるべきである。誰が来世を見て、戻って来ただろうか。

11. <sup>(1)</sup>adakkhuva dakkhu-vāhiyam, <sup>(2)...</sup>(taṃ) saddahasu adakkhu-damṣaṇā /  
<sup>(3)</sup>hamḍi hu suniruddha-damṣaṇe, mohaṇijjeṇa kaḍeṇa kammaṇā //

愚か者のような、あき盲な汝は知者の語ったことを信じなさい。ああ実に、（汝は）なされた愚痴の業によって眼力が極めて妨げられている。

12. dukkhī mohe puṇo puṇo, nivviṃdejja siloga-pūyaṇam /  
evam sahite <sup>(1)...</sup>hipāsae, āya-tulam pāṇehim <sup>...(1)</sup>saṃjae //

迷妄のもとに、何度も何度も人は苦しむ。（それゆえ）称讃や供養を厭うべきである。このように、完成し、自制した人は生き物に対して、自らと同じであると見るべきである。

13. gāraṃ pi a āvase nare, aṇupuvvaṃ <sup>(1)</sup>pāṇehim <sup>(2)</sup>saṃjae /  
samatā savvattha suvate, devāṇaṃ <sup>(2)</sup>gacche salogayam //

また、人は（俗）家に住していても、段々と生き物に対して自制し、何に関しても正しく、良き警戒を持つ（ならば）、神々と同じ世界に行くだろう。

14. soccā bhagavāṇusāsaṇaṃ, sacce tattha <sup>(1)</sup>karejj' uvakkamaṃ /  
savvattha <sup>(2)</sup>viṇīya-macchare, uṃchaṃ bhikkhu visuddham āhare //

尊い人〔Mahāvīra〕の教えを聞き、その真理に関して努力すべきである。あらゆることにに関して物惜しみを除き、乞食の修行者は清浄な施食を食すべきである。

15. savvaṃ naccā ahiṭṭhae, dhamma'tṭhī uvahāṇa-vīrie /  
gutte jutte sadā jae, āya-pare paramāyata-tṭhite //

すべてを知り、克服すべきである。（そして）真理を求め、苦行の実践に精進し、防御し、（苦行などの修行に）集中し、常に自制し、アトマンに専心し、最高のもの〔解脱〕に長く住す（べきである）。

16. vittaṃ pasavo ya <sup>(1)...</sup>nāio, taṃ <sup>...(1)</sup>bāle saraṇaṃ ti mannai /

ete mama tesu vī ahaṃ, no tāṇaṃ saraṇaṃ na vijjāi //

財産や、家畜や、親類（などを）愚かな人は依り所と考える。（しかし）これらは私にとって、また、私はこれらにとって、助けにも、依り所にもならない。

17. abbhāgamitaṃmi vā duhe, aha vā ukkamite bhavaṃtie /  
egassa gatī ya āgati, vidu maṃtā saraṇaṃ ṇa mannaī //

苦が押し寄せて来たり、生命の終わりが近づけば、1人で行き〔死に〕、戻って来る〔再生する〕と考えて、知者は依り所（があるなどとは）考えない。

18. savve saya-kamma-kappiyā, aviyaṭṭeṇa duheṇa pāṇiṇo /  
hiṃḍaṃti bhayāulā saḍhā, jāi-jarā-maraṇehi 'bhiddutā //

すべては自らの業のなせるわざである。（悪しき）人々はわけのわからない苦しみによって恐れに満ち、生・老・死に苛まれ、さすらう。

19. iṇaṃ eva khaṇaṃ viyāṇiyā, ṇo sulabhaṃ bohiṃ ca āhitaṃ /  
evaṃ sahe 'hipāsae, āha jiṇe iṇaṃ eva sesagā //

この（時）こそが（修行の）時機だと知るべきである。悟りは得易くはないと言われる。このように、完成した人は見るべきである。ジナも他の（祖師）達もこのことを語った。

20. abhaviṃsu purāvi bhikkhuvo, āesā vi bhavaṃti suvvatā /  
eyāiṃ guṇāiṃ āhu te, kāsavassa aṇudhamma-cāriṇo //

乞食の修行者達よ、教え、すなわち、良き警戒は過去にもあったし、（現在も）ある。カシュヤパの教えに従って修行する人々はこれらの徳を語った。

21. tiviheṇa vi pāṇa mā haṇe, āya-hite aṇiyāṇa saṃvuḍe /  
evaṃ siddhā aṇaṃtasao, saṃpai je a aṇāgayāvare //

3種のものによって生き物を殺すなかれ。魂の安穩を（求め）、果報を求めず制御すべきである。このようにして、無数（の人々）がシッダ（に到った）。他の人も今、或いは、未来に（シッダに到るだろう）。

22. evaṃ se udāhu aṇuttara-ṇāṇi aṇuttara-daṃsī aṇuttara-nāṇa-daṃsaṇa-dhare /  
arahā nāyaputte bhagavaṃ vesālie viyāhie // tti bemi //

最高の知識と、最高の信仰と、最高の智見を有している、ヴァイシャーリー出身と語られる、アルハットであるジュニャートリ・ブトラ〔Mahāvīra〕尊者がこのように語ったと、私は言う。

## 訳 註

### §1.

1. (1) P本 *kiṇṇu*; この verse は、特に問題となる個所は存在しないが、P本の異読は「何故悟るのか?」という肯定疑問となっている。ただ、*pāda c* の *rāio* (*rātri*) は *rāio* (女性・複数・主格) が正しい形であるが、韻律上このような形になっている。
2. (1) S本, A本, 底本 *buḍḍhā*, (2) P本 *ya*; まず *pāda a* の *vuḍḍhā* (*vrddha*) は底本及びS本, A本では *buḍḍhā* となっていたが、文脈上 *buḍḍhā* は不適当であり、P本, J本にしたがって *vuḍḍhā* と訂正した。また、*pāda b* の *vi* (*api*) がP本では *ya* (*ca*) となっているが、文脈上はどちらでも問題はない。*pāda d* の *tuṭṭai* は *tuṭṭai* (*ati-√vṛt* or *√truṭ* 三人称・単数) が正しい形である。また、この語に関しては I. 2. 1. 6 で説明する。*-i* の部分は、韻律上、長・短どちらでも良い個所であるが、*pāda b* が長音で終わっているため、それに合わせたのであろう。また、本偈と第6偈とは、*Udānavarga* I. 9-10 と相応偈であると考えられる。詳細は、I. 2. 1. 6 で説明する。
3. (1) J本 *vi*, (2) P本, J本, A本 *dehiyā*; *pāda b* の *peccao* は、*pra-√i* の連続体の形 *pecca* (*pretya*) に、従格相当語尾である *-tas* が付加されて *peccāo* となり、韻律より *peccao* となったものと思われるが、連続体に接尾辞が付加されるということは、通例あり得ないことであり、問題が残る。*pāda c* の *pehiyā* (*pra-√ikṣ* 連続体) は、P本, J本, A本では *dehiyā* (*√dṛś* 連続体) となっているが、意味上からも、韻律上からも、どちらでも問題はない。
4. (1) P本 *kaḍe* 'bhigāhae, (2) P本 *teṇaṃ*, J本 *tassā*, (3) P本, J本, A本 'puṭṭhavaṃ; *pāda a* の *jagati* は *jagati* (*jagat* 単数・依格) が正しい形であるが、韻律上 *-ti* と長音になっている。次に、*pāda c* の *kaḍehiṃ gāhai* は、P本では *kaḍe* 'bhigāhae (なしたことがその人の中に入ってくる) となっており、意味が異なっている。さらに、*pāda d* の *tassā* が、P本では *teṇaṃ* (具格) となっており、またJ本では *tassā* (従格) となっている。また同 *pāda* の 'puṭṭhayaṃ (*asprṣṭaka*) が、P本, J本, A本では *apuṭṭhavaṃ* (*asprṣṭavat*) となっている。P本では、*teṇaṃ* が *karmaṇā* を意味し、「経験されない (業) を持っている者は、その (業) から解放されない。」と解釈できる。J本で *tassā* となっているのは、*-ā* の部分が、韻律上長音が求められる場所であるからであり、本訳はこれに従った。
5. (1) P本 *bhūmigatā*, (2) J本 *te vi ṭhāṇāim*; *pāda b* の *bhūmicarā* がP本では *bhūmigatā* となっており、「地の中の生き物」という意味になる。*pāda d* の *ṭhāṇā te 'vi* がJ本では *te vi ṭhāṇāim* となっているが、何故このようになったのかについてはわからないが、底本の *ṭhāṇā* に対する註釈 (*Ṭikā*) では、*sthānāni* (= *ṭhāṇāim*) と釈していることから、*ṭhāṇā* を中性・複数・目的格の形とする考え方が存したことがうかがえる。この説は、この *pāda* の動詞 *cayamti* (*√tyaj*) があることから支持される。
6. (1) 底本 *ṇa*, (2) P本, A本 *ya*, J本 *ya giddhā*, (3) P本 *kammasahe*, (4) P本 *aukhae vi*; まず、*pāda a* の *ya* は、底本では *ṇa* となっている。しかし文脈上、



否定辞 *na* では前後の意味が通らない。他の 4 text は、すべて *ya* となっているので、これを採用した。次に、同 *pāda* の *giddhā* ( $\sqrt{grdh}$  過去分詞) の部分が、P 本、A 本で *ya*、J 本では *ya giddhā* となっている。韻律より考えると、底本の *pāda a* は母音数が 1 つ多い。そこで *giddhā* を *ya* にすると、韻律上は本来の形になる。また *giddhā* (貪欲な) という語がなくても、前後の文脈が通じなくもない。次に *pāda b* の *kammasahā* は、P 本では *kammasahe* となっている。この形は、単数・主格を意図したものと考えられるが、同 *pāda* に *jaṃtavo* (*jantu* 複数・主格) があり、これとは矛盾する。*pāca d* の *tuṭṭati* は、両註釈、Pis. §292 では  $\sqrt{truṭ}$  と解釈するが、Schubring の語彙表 p. 102 では  $\text{ati-}\sqrt{vṛt}$  と考えられている。しかし意味的には、両者とも大差はない。次に同 *pāda* の *āukhyammi* が、P 本では *āukhae vi* となっている。*khae* も *khaya* (*kṣaya*) の依格の 1 つの形であり、*vi* が加えられているのは韻律上からの配慮と思われる。さて先の I. 2. 1. 2. と本偈とは、Udānavarga I. 9—10 に共通部分が存する。

*garbha eke vinaśyante tathāike sūtikākule /*  
*pariṣṛptās tathā hy eke tathāike paridhāvinaḥ ||* (Uv. I. 9)  
*ye ca vṛddhā ye ca dahrā ye ca madhyamapurūṣaḥ /*  
*anupūrvam pravrajanti phalaṃ pakvaṃ va bandhanāt ||* (Uv. I. 10)

ある者達は母の胎内で死に、また、ある者達は産婦の家で死に、また、ある者達は這い廻っている時に死に、また、ある者達は走り廻っている時に死ぬ。

老いた者達も、若い者達も、中年の者達も、順々に去って行く。熟した果実が茎から落ちるように。

この Sūy. と Udānavarga の関係を以下に考察してみよう。まず Sūy. の verse 2 の *pāda d* と verse 6 の *pāda d* とは互いに共通する。したがって、この *pāda d* は、本来どちらかの verse にあったものが他方に移ったのか、あるいは一体であった verse が離れたため、両方に同じ *pāda* が残されたか、その間の事情は定かでないにせよ、verse 2 と 6 は密接な関係を持ち、本来、一体か、あるいは引き続きの verse であった可能性が強い。verse 2 と 6 を並べてみると、Udānavarga I. 9—10 が Sūy. の verse 2 の *pāda a, b* と、verse 6 の *pāda c* に極めて類似した関係にあることに気付く。特に、イタリック部は両者が一致する個所である。この Udānavarga I は「無常」を説く部分であるが、Sūy. I. 2. 1 もまた、「無常」を説き、それからの離脱を説く部分である。このように、両者は共に類似した部分を持ち、その中で、このような類似 verse を持っているということは、Sūy. と Udānavarga の両者に、何らかの共通源泉があったことが考えられる。

7. (1) P 本 *bhave bahussutā*, (2) P 本 *suyī*, (3) P 本 *-karehim*, (4) P 本 *kiccanti*; まず *pāda a* の *bahussutā siyā* は、P 本では *bhave bahussutā* となっているが、これは単数が複数になっていること以外、意味的には問題がない。次に、*pāda b* の *siyā* ( $\sqrt{as}$  願望法) が P 本では *suyī* (*suci* 清らかな) となっている。*suci* で意味を考えると「清浄な者」という項目が 1 つ加わることになる。第 3 に、*pāda c* の *-kaḍehim* が P 本では *karehim* となっている。つまり「なされた」という意味が「なす」と変わるようになるが、文脈的には大差はない。第 4 に、*pāda d* の *kiccanti* が、P 本では *kiccanti* となっている。この *pāda* には *te* (*tad*) という複数の代名詞があり、動詞も複数が要求されるべきである。底本に対する *Ṭika* には、*kṛtyante*

とあり、この個所を複数と考えているようである。しかしこの個所は、韻律上 *kiccati* でなければならず、そのため *kiccanti* という複数を *kiccati* という形で現わしたのではないと思われる。

8. (1) P本, A本 *dhutaṃ*; *pāda b* の *dhuvaṃ* (*dhruva*) がP本, A本では *dhutaṃ* ( $\sqrt{dhū}$  過去分詞 or  $\sqrt{dhṛ}$  過去分詞) となっている。この内,  $\sqrt{dhū}$  では「(業が) 振り払われている」という意味であり,  $\sqrt{dhṛ}$  では底本とさして意味は変わらない。また, *Cūrṇi*, *Ṭikā* の両註釈は, *pāda a* の *vivegam uṭṭhie* と *pāda b* の *avitinne* 以下を同格と考えて, 「決定智のために努力し, …(中略)…説教する者を見よ。」と解釈している。これは *pāda a* の *pāsa* が  $\sqrt{paś}$  の二人称・命令形であることから, このように考えたのであろう。しかし, *pāda a* に二人称代名詞が省略されているとすれば, *vivegam uṭṭhie* がその代名詞にかかるものと考えられることもできる。また, *vivegam uṭṭhie* を *avitinne* 以下と同格とすることには無理があるように思われる。そこで, ここでは註釈に従がわず, *vivegam uṭṭhie* が *pāsa* の主格に相当するものと考えて訳した。
9. (1) P本 *jai vi ya*, (2) S本 *māyāhi*, (3) P本, A本 *gabbhād' aṇaṃtasō*, J本 *gabbhāya 'aṇtasō*, S本 *gabbhāya ṇaṃtasō*, 底本 *gavbhāya ṇaṃtasō*; まず, *pāda b* の *bhūṃjiya* について, この形は通常  $\sqrt{bhuj}$  の連続体を示すものであるが, そうなると, この *pāda* には主動詞がなくなる。*Cūrṇi*, *Ṭikā* の両註釈には *bhūṃkte* (三人称・単数) であるとしているが, *bhūṃjiya* が三人称・単数であると考えことは不可能である。ところで, *pāda a* と *b* とは, 両方とも *jai vi ya* (*yadi api ca*) で始まる同一構文である。そして, *pāda a* の主動詞 *care* は, 願望法・三人称・単数の形である。したがって *pāda b* でも願望法が来る方が自然である。*bhūṃjiya* が願望法となる可能性はあるのだろうか。Pis. §464 には,  $\sqrt{han}$  の願望法として *haṇiyā* (*hanyāt*) という語形が示されている。一方, Pis. §459 には,  $\sqrt{bhuj}$  の願望法として *bhūṇjejjā* という形が示されているが, この形は Skt. の *bhūṇjiyāt* が想定語形 *bhūṇjiyāt* を介して形成された語形であるとされている。ところが, *bhūṇjiyāt* がそのまま Prakrit 化されれば, *bhūṇjiyā* となるはずである。ところが, *bhūṃjiya* の語尾の *-a* は, 韻律上では短音が要求されている場所である。したがって, ここは本来 *bhūṃjiyā* という先述の願望法の形が, 韻律上 *bhūṃjiya* となったと考えられる。この *bhūṃjiya* という願望法の形の用例は, Pis. 等の文法書にも, また他の Jaina 古層經典にも, 現在のところ見出し得ないが, 少なくともこの個所は願望法と考えるべきであろう。次に同 *pāda* の *māsa-m-aṇtasō* の *-m-* は *Cūrṇi* によると *sandhi-consonant* であるとされる。第3に, *pāda c* は, *Ṭikā* に *māyādinā mīyate*, *Cūrṇi* に *yadi...māyadir...mīyate* とあるのに従って訳す。第4に, *pāda d* の *gabbhāya* (*garbha* 与格) が底本では *gavbhāya* となっていたが, 他の4本とも *gabbha-* であることにより訂正した。また, 次の *ṇaṃtasō* という語は存せず, P本, J本, A本などに従って, *'aṇtasō* と解釈し, 語頭の *a-* が韻律上から欠如しているものと考えた。また, この *verse* の内容は次の *Dhammapada* 141 (PTS) に近いものである。

na naggacariyā na jaṭṭa na paṇkā, nānāsakā thaṇḍilasāyikā vā /  
rajo ca jallam ukkuṭṭikappadhānam, sodhenti maccam avitiṇṇakaṇkham //  
(Dhp. 141)

裸行の行も、髻を結うのも、身体が泥にまみれるのも、断食も、露地に横臥するのも、塵や泥を身体に塗るのも、屈んで動かないのも、疑惑を遠離していない人を淨めることはできない。

11. (1) P本 parakkame ; pāda c の pakkame (pra-√kram 願望法) が、P本では parakkame (parā-√kram 願望法) となっており、「奮闘すべきである」という意味になる。
12. (1) P本 vīrā viratā hu pāvakā, (2) P本 kodhā, J本, A本 kohā; まず, pāda a がP本では, vīrā viratā hu pāvakā 「英雄達は悪しきもの〔業〕を慎しんで」となっている。次に, pāda b の kohā は, P本, J本, A本いずれも語尾の -a が長音となっている。ところで, 底本の pāda b は 1 mātra 不足している。そのため kohā の語尾 -a が長音とされたのであろう。また kāyariya (kātarika) は, 両註釈で māyā となっていることからこう訳した。
13. (1) P本 luppadhe, (2)P本, J本 sahie 'dhipāsae, A本 sahie 'hipāsae, S本 sa-hiehī pāsae, (3) P本, J本 puṭṭho 'hiyāsae, A本 puṭṭhe 'hiyāsae; まず, pāda a の luppaē について, この形は通常 √lup の受動形・三人称・単数を示すものであるが, そうすると aham の人称と一致しない。Ṭikā では, lupyē (√lup 受動形・一人称・単数) と解釈している。P本の luppadhe の形は不明であるが, Cūrṇi では lupyāmi (√lup 一人称・単数) と解釈している。また pāda b には luppaṃti (受動形・三人称・複数) とあることから, luppaē が受動形であることは確かであり, 文脈・註釈から判断して一人称であるということもかなり確実である。次に pāda c の sahiehīṃ pāsae について, まず sahiehīṃ は, P本, J本, A本いずれも sahie 'hi- ('dhi-) というように分けている。底本に対する Ṭikā でも, sahiehīṃ を複数・具格とせず, 単数・主格としている。また, 韻律上からも 1 mātra 多くなっている。これらを総合すると, sahie と hiṃ を分け, hiṃ の -ṃ を取ることによって, sahie 'hipāsae という形にする方が適当であると思われる。また sahie は, Cūrṇi, Ṭikā いずれも svahita と解しているが, Schubring の語彙表 p. 106 の解釈を用いて, sādhiṭa (√sādh 過去分詞) と考えることにした。次に pāsae は, 両註釈とも願望法・単数の形であると解釈しており, 文脈上からもその説が適当であると思われる。第3に, pāda d の puṭṭhe ahiyāsae は, P本, J本, A本いずれも puṭṭho(e) 'hiyāsae としている。韻律上からも 1 mātra 多くなっているので, ここは puṭṭhe 'hiyāsae とするべきであろう。またこの ahiyāsae も先述の pāsae 同様, 願望法とするのが適当である。
14. (1) P本, J本, A本 aṇāsaṇādihiṃ, S本 aṇāsaṇāhiṃ; pāda a の kisae 及び pāda c の pavvae は, 先述の如く願望法と考える。次に pāda b の aṇāsaṇā iha について, まず aṇāsaṇā は aṇasaṇā (anaśanāt) が韻律より aṇā- となったものと思われる。次に, この部分は他の4本においては, aṇāsaṇādihiṃ (-āhiṃ) となっており, 「断食などによって」と意味されているものである。しかし底本も, 語尾が -nā という従格の形になっており, 意味的にも大差はない。また次偈との関連においては, 苦行(断食)が壁の漆喰を振り払う作用に喩えられていることにもなる。

15. この verse に共通するとされているものに Samyutta-Nikāya 9. 1 (PTS) がある。  
 sakuṇo yathā pamsukuṇḍito, vidhunaṃ pātayati sitaṃ rājaṃ /  
 evaṃ bhikkhu padhānāvā satimā, vidhunaṃ pātayati sitaṃ rājaṃ // (SN. 9. 1)  
 あたかも、塵に覆われた鳥が、附着した塵を振り払って落とすように、そのように  
 比丘は正念をもって努力し、附着した塵を振り払って落とす（べきである）。  
 R. Morris; 'Note and Queries', *Journal of the Pāli Text Society*, 1891-3 pp.  
 48-49 参照。両者の pāda a, b は dhamsayai が pātayati と変っている違いを除け  
 ば、まったく同一である。試みに、漢訳を参照すると、『別訳雜阿含經』卷十六で  
 は、

如鳥爲塵塗	奮翮振塵穢
比丘亦如是	禪思去塵勞

と説かれる。このように漢訳においても, pāda a, b が一致する。この pāda a, b が Pāli, 漢訳両伝に見られることより, 少なくとも Pāli 独自の伝承でないことがうかがえる。次に, pāda c, d は両者に多少の相違が存する。しかし, pāda c の uva-hāṇavaṃ (upadhānavat) と padhānavā (pradhānavat) とは同語根の動詞であり, 単語自体も近い内容を示している。ただ pāda d では, まったく違った内容が伝えられていることに気づく。これは何故だろうか。pāda a, b は比喩句であり, 通常 pāda c, d は pāda a, b と同じ主動詞が用いられるが, Sūy. では khavai (√kṣi) という異なった動詞を用いている。そこで, pāda d は, Jaina が意図的に改変したと考えたい。すると, 仏教は原伝承を忠実に残したが, Jaina は, それを変える必要性があったということになる。その原因として考えられるのは, 次の理由だけである。すなわち, 「塵」は Upaniṣad 時代から業の比喩的表現であり, 当然, 業を意味する言葉である。そのため, 修行して塵を振り払うと言えば, それは業を振り払うと言うのと同じ意味になる。それをあえて karman という語を入れ, そして, それを滅する(√kṣi) とすることは, 「業を滅する」ことと, 「塵を振り払う」ことの同一性を強調せんがために他ならない。ここに Jaina の意図があったのではなからうか。これに関しては, 拙稿「Jaina の tapas に関する一考察」『印仏研』32巻2号(昭59. 3, pp. 142~143) 参照。また仏教側にとっても, この用例は業を物質的に捉えている個所であり, 仏教の初期時代には, 業を物質的なものとして捉える思想が存在したということも充分に考え得る。

16. (1) P本 tavassiyam, (2) P本, A本 labhe jaṇo, J本 labhe jaṇā; まず, pāda a に対する Ṭikā では, utṭhiyam を ut-√sthā の連続体とし, esaṇam を「乞食に」と解釈して, 「出家し, 乞食に奮闘して」と註している。しかしこの偈の主語は, pāda c の ḍaharā 及び vuḍḍhā であるから, utṭhiyam を連続体とすることはできない。そこで, ここでは Cūrṇi の解釈に従い utṭhiyam を ut-√sthā の過去分詞とし, esaṇam を「追求する」という意味にとり, aṇagāra-m-esaṇam を Bahuvrīhi compound と考え, -m- を sandhi-consonant と解した。次に pāda b の tavassiyam [Skt. tapasvinam (tapasvin 複数・目的格)] が, P本では tavassiyam となっている。P本に対する Cūrṇi では, 何も註されていないが, tapasvika か, あるいは tapaḥ-śrīta (苦行に依拠した) のことではないかと考えられるが, どちらでも底本と意味の大差はない。第3に pāda c の ḍaharā vuḍḍhā は「若い女(妻), 老いた女(母)」と考えることもできるが, ここでは両註釈に従って「若い人達(子供), 老いた

人達(父母)」と訳した。また patthae (pra-√arth) は願望法の形であるが, Schu-bring の語彙表 p. 66 では単数で考えられている。ここでは両註釈に従って, 複数と考えた。第4に, pāda d の labhejja ṇo について, この ṇo は Ṭikā にも註釈されておらず, 意味不明である。しかし P本, J本, A本に labhe jaṇo(ā) とあることから, これらの Text の方を採用した。

17. (1) P本 se kare, (2) J本 rovaṃti, (3) P本, J本, A本, S本 bhikkhum, (4) P本, A本 ṇaṃ saṇṇavettāe; まず pāda a の kāsiyā (√kr 願望法) が, P本では se kare (彼になす) となっている。次に, pāda b の rovaṃti (√rud) が, J本では rovaṃti (√ru 叫ぶ) となっている。第3に bhikkhu について, これにかかる前後の形容詞が目的格となっており, pāda d の saṃthavittāe の目的語に当たるため, 目的格と考えるべきだろう。事実, 他の4本はすべて bhikkhum となっている。これは韻律上の配慮と思われる。第4に, pāda d の ṇa saṃthavittāe について, saṃthavittāe は sam-√sthā の使役活用・不定詞の形であるため, その前に否定辞 ṇa が来る必要はない。P本, J本には, ṇaṃ saṇṇavettāe (sam-√jñā 使役・不定詞) となっており, こゝは代名詞 ṇaṃ の -m が, 韻律より省略されたと見るべきであろう。
18. (1) P本 jai ṇaṃ, A本 jai taṃ, (2) P本 ānejjā ṇa baṃdhitā, A本 ānejjā taṃ baṃdhitā, (3) P本, A本 taṃ, (4) P本, A本 avakaṃkhiṇaṃ, (5) P本 ṇa saṇṇavittāe, A本 taṃ saṇṇavettāe; まず pāda a の jai vi ya が, P本, A本では jai taṃ (ṇaṃ) [yadi taṃ] となっている。次に同 pāda の lāviyā について, Ṭikā では lāvayanti (√lā 刈る?) と註しており, Cūrṇi では何も書かれていない。しかし「刈る」では意味が通らない。ところで, R. Turner の *A Comparative Dictionary of the Indo Aryan Languages* の No. 11016 には √lāp (語りかける) の使役活用が lāvei となるとされ, このことから, 使役活用の過去分詞が lāviya となる可能性がある。ここでは, この √lāp 説を採用し, 「誘惑する」と訳すことにした。第3に, pāda b の ṇejjāhi ṇa baṃdhiṃ について, baṃdhiṃ は √bandh の不定詞であり, その前に否定辞 ṇa が来る必要がない。A本では, ānejjā taṃ baṃdhitā (過去分詞) となっており, こゝの ṇa も代名詞 ṇaṃ が韻律より ṇa となっていると解した。第4に, pāda c の avakaṃkhae (ava-√kāṅks 願望法) がP本, A本では avakaṃkhiṇaṃ (avakaṅkṣin 目的格) となっている。最後に, pāda d の ṇa saṃthavittāe は, 前偈と同様 ṇa を ṇaṃ の韻律上の省略形とする。
19. (1) P本 māti piti thi patī ya bhāyaro, (2) P本 pāsāhi ṇa, J本 pāsāhi ṇe, A本 posāhi ṇe, (3) P本 paralogaṃ, J本, A本 logaṃ paraṃ, (4) P本 jahāhi uttamam, J本 jahāsi posa ṇe, A本 jahāsi posañe; まず pāda b が, P本では māti piti thi patī ya bhāyaro 「母や父や女や主人や兄弟」となっている。次に, pāda c の posāhi ṇa について, posāhi (√puṣ 命令形) は, P本, J本では pāsāhi (√pās 命令形) となっている。また次の ṇa は, J本, A本で ṇe (asmān) となっている。Ṭikā でも, この ṇa を asmān と註しているところから, 一人称・複数・目的格と解することにした。第3に, pāda d の loga paraṃ について, P本では paralogaṃ となっており, J本, A本も logaṃ となっている。この loga は jahāsi の目的語で

あり, *logam* となるべきである。しかし, ここの韻律上より, *loga* となっていると考えられる。

21. (1) P本 *davi'eva samikkha*, (2) P本 *paṇatā virā*, J本 *paṇayā virā*, A本 *paṇae vire*, (3) P本 *sivam*; まず *pāda c* の *paṇae viram* について, P本, J本には *paṇatā (paṇayā) virā* となっており, 複数・主格の形となっている。また *Ṭikā* も *praṇatā virāḥ* と註している。ところで, この *pāda c, d* には主動詞がない。*Cūrṇi* と *Ṭikā* は, それぞれ *padyate* ( $\sqrt{\text{pad}}$  赴く), *anuṣṭheyaḥ* (*anu-√sthā* 義務分詞, 実行されるべき) という動詞をおきなっている。しかし, *pāda d* の内容は, 次の偈の冒頭の *veyāliya-maggam* 「(業を) 破壊する道」にかかるものと考えられるから, 動詞をおきなう必要がないと思われる。また *veyāliya-maggam* を目的格とする *āgao* (*ā-√gam* 過去分詞) が単数であるため, *paṇae viram* も, 上記のように考えれば単数で良いことになる。A本には *paṇae vire* とあり, ここでは, この形を訳すことにした。次に *pāda d* の *dhuva (dhruva)* がP本では *sivam (śiva)* となっている。このように, この偈の *pāda c, d* は 意味的に次偈に続くものである。
22. (1) S本 *nivvuḍo*, (2) S本 *susamvuḍam*, (3) J本 *carejjāsi*; まず *pāda b* の *samvuḍo* (*sam-√vṛ* 過去分詞) がS本では *nivvuḍo* (*ni-√vṛ* 過去分詞) となっているが, 意味は同じである。次に *pāda d* の *susamvuḍe* がS本では *susamvuḍam* となっているが, これは次の *care* の目的格と考えたものであろう。またこの *care* は J本では *carejjāsi* (願望法・二人称・単数) となっている。

## §2.

1. (1) P本 *je vidū*, (2) P本, J本, A本 *aha 'seyakarī*, (3) P本, J本, A本, S本 *aṇṇesi*; まず, *pāda a* の *taya* は *tayam (tvacam)* となるところが, 韻律上 *taya* となっている。Pis. §350 にこの個所が引用されている。*pāda d* の *aha seyakarī* が P本, J本, A本で *aha 'seyakari* とあり, *Ṭikā* にも *aśreyaskarī* と註釈しており, *seya-* の前に *a-* が省略されているものと解した。また同 *pāda* は, 韻律上からは *anesī* の部分が乱れている。つまりこの部分は ―― が要求される個所であるが, ―― となっている。他の4本は *aṇṇesi* (――) となっているが, これでもまだ母音数が1つ多い。底本の脚註には *nesi* (――) という variant が示されているが, 韻律上からは, この形が適している。そこで, 語頭の *a-* が省略されているとして, *'nesi* とするのが良いように思われる。
2. (1) P本, J本, A本, S本 *paribhavaī*, (2) P本 *ciram*, (3) A本 *iha*, (4) 底本 *bhajjai*, P本 *majjae*; まず, *pāda a* の *paribhavaī* は, 韻律上からは語尾の *-i* が長音でなければならない。他の4本は, いずれも *paribhavaī* となっている。次に *pāda b* の *maham* がP本では *ciram* (長く) となっているが, 意味は同じである。第3に, *pāda d* の *majjai* は底本では *bhajjai* となっていたが, *Ṭikā* 及び他の4本から *majjai* と訂正した。またP本は *majjae* ( $\sqrt{\text{mad}}$  願望法) となっている。
3. (1) P本, A本 *ida*, (2) P本, J本, A本, S本 *care*; *pāda d* の *yare* について, 他の4本では *care* となっているが, *Ardha-Māgadhi* では語頭の *c* が *y* になること

もある (ca→ya) ので、訂正しなかった。

5. (1) P本, S本 pharusehi, J本, A本 pharusehiṃ; まず, pāda c の parusehiṃ は, 韻律上からは parusehi である方が良い。P本, A本にも pharusehi (=parusehi) という形が示されている。次に, pāda d の samayaṃmi について, Ṭikā では saṃyama (自制) と註釈し, 英訳では indifference (samatā, 無関心) としているが, この形から見れば samaya (教え) が自然である。Cūrṇi, 独訳もこれを支持している。
6. (1) P本 paṇha-samatthe, (2) P本 samitā, (3) P本 hu, (4) P本 kuppe; まず, pāda a の paṇṇa-samatte (prajñā-samāpta) がP本では paṇha-samatthe (praśna-samartha, 「質問 (に答えること) ができる」) となっている。
7. (1) P本 savvaṭṭhesu sadā, (2) P本 vatume aṇāile; pāda c の va sayā がP本では vatume (padma, 蓮?) とされている。さて, この pāda c, d は SN. VII. 1. 9. 17中の偈と同じ思想を持っている。また, pāda a, b が Sn. 811 の pāda a と対応する。sabbattha muni anissito, (Sn. 811 pāda a) Bollée, p. VI 参照。
8. (1) P本 uvehāe, J本 uvehiyā; pāda b の samhiyā (sam-√ikṣ) がP本では uvehāe, J本では uvehiyā (ともに upa-√ikṣ) となっている。
9. この偈の pāda c, d が Sn. 805 の pāda a, b に対応する。  
 socanti janā mamāyite, na hi santi niccā pariggahā / (Sn. 805, pāda a, b)  
 人々は我執した者に憂う。何となれば, 恒常なる所有物は存在しないから。  
 Bollée, p. VI 参照。  
 また, pāda d の ṇiya が通常は Skt nija (自分の) に相当するが, ここでは Sn. の対応偈や Cūrṇi に従って nitya とした。
10. この偈の pāda c, d が Sn. 805 の pāda c, d に対応する。  
 vinābhāvasantam ev' idam, iti disvā nāgāram āvase // (Sn. 805 pāda c, d)  
 この (所有物) は, まさに変化するものであると見て, 在家に住すべきではない。
11. pāda d の viū mamtā に関して, Ṭikā は vidvān と註釈し, Cūrṇi は viū (vidvān) mamtā (matvā) と註釈している。Ṭikā は mamtā の説明をしていないから viū-mamtā (vidmat) と考えているのか, そうでないのかわからない。Pis. §582 に mantā (matvā) の説明があり, ここでは viū が韻律上 viū (vidvān 単数・主格) から変化したものと考え, mamtā を matvā (√man 連続体) と考えた。次に, saṃthavam (saṃstava) について, Ṭikā は paricaya (親愛) と解釈している。これは, 先述の I. 2. 1. 6 の用例からこのように解釈したものであろう。しかし, ここでは stava (讃辞) の意味の方が文脈に合致していると思われる。
12. (1) P本 care; まず pāda a の care と pāda b の e ge について, 底本は ( ) 内に

別の形を示しているが、これは韻律上の配慮と思われる。また、pāda c の uvahāṇa-(upadhāna) は tapas と註されているが、この説に従うと tapas が samvara の機能を持っているということが明示されていることになる。

13. (1) P 本 yāva 'vaṃguṇe, (2) P 本, J 本 vayiṃ, A 本 vaiṃ, (3) P 本 samucchati ; pāda a の pihe について、この語形については註釈には示されておらず、ただ Cūṇi に pihitam [api(pi)-√dhā 過去分詞] とされているだけである。英・独訳も「閉める」ことを意味する訳を与えている。しかし api-√dhā の Ardha-Māgadhī 形の願望法は pihe (Pis. §500) であって、pihe ではない。韻律上からも pihe よりも pihe の方が適当であるのに、あえて韻律を無視して pi- と長音にした理由がわからない。異本も全て pihe となっている。したがって、pihe となった理由は理解できなかったが、文脈上の意味によって api-√dhā の願望法 pihe の意味に解した。また、この偈から第16偈までは、住む者のない家での種々の危難について述べられている個所であるが、pāda c の内容はこの一連の内容に一致しない。伝承の乱れがあったのではないかと考えられる。
14. pāda b の 'hiyāsaе について、Ṭṭkā は adhi-√sah (耐える) と解釈しているが、これは意味的に註釈しているにすぎない。Pis. §499 には Āyāraṅga I. 8. 2. 15 の ahiyāsaе を adhi-√ās (居住する) の Ardha-Māgadhī 形としている。しかし、Schubring の語彙表 p. 99 では adhi-√vas (耐える) としている。ここでは Schubring の説に従って、adhi-√vas の願望法と考えた。
15. (1) P 本 vi seviyā, (2) P 本, J 本, A 本 harise ; まず、pāda b の 'hiyāsiyā について、これは前偈と同様に adhi-√vas と考え、その使役・願望法とした。また P 本では vi seviyā (√sev, 享受する) となっている。次に pāda c の hārise は harise (√hr̥s 願望法) が正しい形であるが、韻律より hārise となったものである。P 本, J 本, A 本には harise とある。
16. (1) P 本 jāva 'bhikaṃkha, J 本 āva 'bhikaṃkhe ; この偈も pāda a, b の内容と pāda c, d の内容が一致しない。伝承の乱れが考えられる。また pāda a の abhi-kaṃkhejja (abhi-√kāṅkṣ) が P 本では jāva 'bhikaṃkha, J 本では āva 'bhikaṃkhe (yāvat abhi-√kāṅkṣ) となっている。
17. この偈は Sn. 810 と対応する。  
 paṭilīnacarassa bhikkhuno, bhajamānassa vivittam ānaṃ /  
 sāmaggīyaṃ āhu tassa taṃ, yo attānaṃ bhavane na dassaye // (Sn. 810)  
 隠遁して行じる比丘であり、(人里)離れた坐処に親近し、俗世間に自己を現わすことがない彼は、かの涅槃にある者であると、(人々は)言う。  
 このように、pāda a が異なること以外はほとんど共通している。さて、まず pāda b について、Sūy. では ānaṃ (住処) とあるのが、Sn. では ānaṃ (意味不明) となっている。PTS の版本は脚註に MS. の異読を掲げているが、ānaṃ となっているのは Niddesa の PTS 版のみとしている。しかし、意味不明の語よりも、形容詞 vivittam (vi-√vic, 離れた) との対応からも ānaṃ とする方が、より適切で



はなかるうか。しかも、Jaina 側のパラレル偈である Sūy. に āsapam と伝えられていることから、この考えは首肯されよう。そうすると、少なくともこの部分に関しては Sūy. の伝承の方が適切、乃至は原伝承を忠実に伝えていることになる。次に、pāda d で、Sūy. では bhae (bhaya, 恐れ) とある個所が、Sn. では bhavane (迷いの世界) となっている。この両語には、いずれの Text にも異読は確認されず、原伝承を確定することはできなかった。

Bollée, p. VI 参照。

18. (1) A本, S本 -ṭhiyassa; まず, pāda b の dhamma-ṭṭhiyassa の部分は1 mātra 多くなっている。韻律から考えると -ṭhiyassa の方が良い。A本, S本には -ṭhiyassa とある。次に pāda c の saṃsaggi について Ṭikā では saṃsargaḥ という主格として解しているが、独訳 p. 134 の脚註では saṃsagge という依格としている。ここでも、この説に従い saṃsagge の -e が韻律上 -i になっていると解した。また、次の asāhu-r-āihiṃ について、Cūrṇi, Ṭikā の両方ともが asāhu-rāihiṃ (rāja) としている。しかし、先の独訳の脚註に asāhu-r-āihiṃ という形(つまり、-r- を sandhi-consonant と考える)があり、これを採用した。また pāda d の taḥāgaya (tathāgata) は仏教でいう「如来」の意味では用いられていない。
19. (1) P本 -karassa, (2) P本 dhuvam, (3) P本 samjate; ここでのP本の variant は意味の上からは、ほぼ同じ内容を示している。また韻律から見ても、同じである。
20. (1) P本, J本, A本 -avasakkiṇo, (2) P本 tam, jam, (3) P本 bhakkhati; まず, pāda b の avasappiṇo (avasarpin) がP本, J本, A本では, ava-sakkiṇo (ava-ṣvaṣkin, やめる) となっている。また, pāda d の bhumjati (√bhuj) がP本では bhakkhati (√bhakṣ, 食べる) となっている。また第18偈とこの偈において、熱湯 (usiṇōdaga) と冷水 (siṇōdaga) についての言及がなされているが、Jaina では虫などが混じっているかもしれない冷水の使用は禁じられており、他の人が作った熱湯を用いねばならない。また, pāda d の内容は、他人に招かれて食事をしないという Jaina 思想の萌芽とも考えられる。
21. pāda a の samkhayam について、Ṭikā は saṃskarttuṃ (sam-s-√kṛ 不定詞) と解して、「つなぎ合わせる」と意味付けている。英訳もこの説に従って、prolong (延長する) という訳を与えている。しかし、sam-s-√kṛ からこの意味を引き出すには多少無理がある。ここでは saṃskṛta という形でとらえて「浄化された→清浄」という意味を採用した。他方、na-y-asamkhaya (a-samkṣaya) 「尽きないことはない」という形と考えることもできる。この場合、-y- を sandhi-consonant と考える。
23. インドのサイコロ賭博では, kaḍa (kṛta, 4) が最も良く, kali (1) が最も悪い。
26. (1) P本 karaṃti; pāda d の dhammāo (dharma-tas) が韻律上 dhammao になっている。
28. (1) P本, J本, A本 kaya-kirie ya ṇa; まず, pāda a は韻律の上からは乱れてい

る。つまり 1 mātra 多くなっている。異本も同様である。次に pāda d の kaya-  
kirie と ṇa の間に、P 本、J 本、A 本には ya が入っている。韻律からも ya が入  
った方がよい。

29. (1) P 本 dhamme; pāda a, b の channaṃ ( $\sqrt{\text{chad}}$  過去分詞), paśamsa (pra-  
śamsa), ukkosa (utkrośa), pagāsa (prakāśa) について, Cūrṇi, Ṭikā の両註釈は  
channaṃ→māyā, paśamsa→lobha, ukkosa→māna, pagāsa→krodha と註釈してい  
る。しかしこの4つの語には、これら4つの煩悩の意味は存しない。そこで、これら  
の語の意味に従って訳すと以下の如くなる。「(真の) バラモンは、隠れて呪ってはい  
けない。また、公然と自慢してもいけない」この中で、praśamsa には「呪う」とい  
う意味はないが、śamsa にはその意味があり、文脈上この意味を採用した。さて、こ  
の意味がどうして4煩悩の意味に註釈されているのかについては解明できなかったが、  
後代の解釈に何らかの意図があったことは確かである。また、pāda d は韻律の上か  
らは 1 mātra 多くなっている。さらに Cūrṇi の註釈によると、pāda c, d の訳は  
「(業を) 振り払うことをよく実践した 謙虚な人は、(煩悩) を正しく捨てているとい  
われる」となる。
30. pāda a の sahie は I. 2. 1. 13 と同様、 $\sqrt{\text{sādh}}$  の過去分詞と解した。
31. (1) P 本 ma 'ṇussutaṃ, (2) P 本 'vitadham, (3) P 本 adhiṭṭhitaṃ, A 本 anuṭṭhi-  
yaṃ, (4) P 本 sāmāigaṃ padaṃ; pāda b の taṃ taha (tathā) が、P 本では  
'vitadham ('vitatha) となっている。
- §3.
2. (1) P 本、J 本、S 本 saṃtinnehi, (2) P 本、J 本、A 本 addakkhū; まず、pāda b  
は韻律の上からは 1 mātra 多くなっている。他の4本は saṃtinnehi となっており、  
韻律の上からはこの方がよい。また、pāda d は 2 mātra 少ない。P 本、J 本、A  
本では addakkhū となっており、韻律の上からはこの方がよい。
3. (1) P 本、A 本 vaṇiehi, (2) P 本 āniyaṃ, (3) P 本 paramāṇi mahavvatāṇi, akk-  
hātāṇi sarāi-bhoyaṇāṇi; まず、pāda a は韻律上からは 1 mātra 多い。P 本、A  
本の vaṇiehi の方が韻律的にはよい。また、同 pāda の āhiyaṃ (ā- $\sqrt{\text{dhā}}$ , 過去分  
詞) が P 本では āniyaṃ (ā- $\sqrt{\text{nī}}$  過去分詞, 将来された) となっている。また、  
pāda c, d で、P 本がすべて中性名詞をとるのは、bhojana と、時折 mahavvaya も  
中性だからであろう。
4. (1) P 本、J 本 kāmesu, (2) P 本 kim aneṇa; まず、pāda b は韻律的に相当乱れ  
ている。4 mātra 多くなっており、P 本、J 本でも 3 mātra 多くなっている。また、  
pāda c の kivaṇeṇa (krpaṇa) が P 本では kim aneṇa となっており、これに従っ  
て訳すと「こんなことはどうということはない、と同じように傲慢である」となる。
5. (1) P 本 jeṇa tassa tahiṃ appathāmatā, acayaṃto khalu se 'vasīdati; pāda c, d  
が P 本では大いに異なっている。それを訳すと「そして、そのことによって、その

(牛は)力がなくなり、力が弱くなって倒れる」となる。意味的にはそれほど異なっていないようであるが、底本とP本には伝承の相違があるようである。

6. (1) P本, A本 *kāmesaṇā*, (2) P本 *payahāmi*; pāda a の *kām'esaṇam* がP本では *kāmesaṇā* という複数・目的格の形になっている。また, pāda b の *payahejja* (*pra-√hā*) がP本では *payahāmi* という1人称・単数・現在形の形となっている。
7. (1) P本 *tave*, (2) P本 *aṇusāse*, (3) P本 *paritappati*; まず, pāda a の *bhave* がP本で *tave* ( $\sqrt{\text{tap}}$  願望法) となっている。また, pāda b の *aṇusāsa* (*anu-√śas* 命令形) がP本では *aṇusāse* (願望法) となっている。また, pāda d の *paridevati* (*pari-√div*) がP本では *paritappati* (*pari-√tap*) となっている。
8. (1) 底本 *taruṇa evā (ṇe vā) sa-sayassa*, P本 *taruṇago vāsasayassa*, J本 *taruṇae vāsasayāu*, A本 *taruṇa eva vāsasayassa*, S本 *taruṇe vā sasayassa*, (2) P本 *tiuṭṭati*; pāda b の *taruṇe vāsa vāsa-sayassa* が底本では *taruṇa evā (ṇe vā) sa-sayassa* となっている。これは *taruṇa evāsa-sayassa* と *taruṇe vāsa-sayassa* の2つの読みを示したものであるが、前者の *evāsa-* は *eva* と *vāsa* の両方の言葉を合わせ持って用いられていると思われる。次に, *tuṭṭati* がP本では *tiuṭṭati* ( $'ti-√vṛt$ ) となっている。これは I. 2. 1. 6 で考察した Schubring の *tuṭṭati* の解釈 ( $ati-√vṛt$ ) を傍証する異読となるものである。
9. (1) P本 *-kālaṃ*, (2) P本 *āsūriyaṃ*; pāda b の ( ) 内は底本が韻律上ふさわしい形を入れているものである。pāda c は韻律の上からは 1 *mātra* 少ない。P本の *āsūriyaṃ* が韻律上は適している。
10. (1) P本, J本 *kāritaṃ*; pāda c の *kāriyaṃ* ( $\sqrt{\text{kr}}$  義務分詞) がP本, J本で *kāritaṃ* ( $\sqrt{\text{kr}}$  使役・過去分詞) となっている。また, pāda c, d の内容は刹那主義論の説と思われる。
11. (1) P本, J本 *addakkhu*, (2) P本 *saddahasū addakkhu-*, J本 *saddahasu addakkhu-*, A本 *saddahasū adakkhu-*, (3) P本, S本 *mohaṇiṇa*; まず, pāda a は韻律上 1 *mātra* 少ない。P本, J本では *addakkhu* となっており、この方が韻律上適合している。また, pāda b も ( ) 内の語を除くと 2 *mātra* 少ない。そこで底本は (*taṃ*) を補って韻律を合わせている。異本中、P本の *saddahasū addakkhu-* が韻律上適合している。次に, pāda d も韻律上 1 *mātra* 多くなっているが、P本, S本の *mohaṇiṇa* は韻律の上からは適合している。また、この *mohaṇijja...kam-muṇā* とは、Jaina の8つの業の種類の中の *mohaṇiya-karman* のことである。
12. (1) P本 *'dhipāsiyā, āyatule pāṇehi bhavejjasi*; pāda c の途中から d にかけて、P本は多少異なっている。しかし、意味的には「生物に対して、汝は自らと同じはずであると見るべきである」と、ほぼ同じ内容を示している。
13. (1) P本, A本, S本 *pāṇehi*, (2) J本 *salogatam*; pāda b は韻律の上からは 1

mātra 多くなっている。P本, A本, S本の pāṇehi とすれば、韻律上適合する。また、この偈は在家信者に対する教説であると考えられるが、この第2章において、在家信者に対する言及がなされているのはこのみであり、その他はほとんどが出家者に対するものである。

14. (1) P本, J本 kareh', (2) J本 'vaṇīya-; pāda b の karejj' ( $\sqrt{kṛ}$  願望法) がP本, J本では, kareh' ( $\sqrt{kṛ}$  命令法) となっている。また, pāda c の viṇiyā ( $\sqrt{vi-}$  過去分詞) がJ本では 'vaṇīya- ( $\sqrt{pa-}$  過去分詞, 除く) となっている。
15. pāda d の paramāyata-tṭhite について, Cūrṇi, Tīkā とともに最後の tṭhite を arthika (求める) と解釈しているが, 語形から考えると  $\sqrt{sthā}$  の過去分詞 sthita とする方が適当であると考えた。
16. (1) P本, J本 nātayo, bālajaṇo。
17. (1) P本 vōvakkamite, J本, A本 vōvakkamie; pāda b の ukkamite ( $\sqrt{ut-}$   $\sqrt{kram}$  過去分詞) がP本, J本, A本では uvakkamite (-ie) ( $\sqrt{upa-}$   $\sqrt{kram}$  過去分詞, 近づく) となっている。また pāda d の vidu maṃtā は I. 2. 2. 11 と同様 vidvān matvā と考えた。
18. (1) P本 vādhi-; pāda d の jāi (jāti) がP本では vādhi- (vyādhi, 病気) となっている。
19. (1) P本 'hipassiyā。
20. (1) P本, J本, A本 bhaviṃsu; pāda b の bhavaṃti がP本, J本, A本では bhaviṃsu (Aorist) となっている。
21. pāda a の tiviheṇa (trividha) について, 註釈では3種のものを2種類説明している。一方は「身・口・意」のことであり, 他方は「自らなすこと, 他人にさせること, 他人がすることに同意すること」であるとする。
22. この個所は韻文のように思えるが, 英訳・独訳とも散文としている。そして, 最後の bemi は註釈によると Sudharma Svāminが語ったとされる。

(文学研究科博士後期課程・仏教学専攻)